

「テロ」と「ジハード」のレトリック
“TERÖR”ÜN VE “CİHAD”IN RETORİĞİ

ジャーネル・タスラマン

CANER TASLAMAN

İstanbul Yayınevi

第 8 版発行：İstanbul Yayınevi, 2014 年

書名：「テロ」と「ジハード」のレトリック著者：ジャネ

ル・タスラマン www.canertaslaman.com

facebook.com/canertaslaman

YouTube: Caner Taslaman

Videoları [Twitter.com/ctaslaman](https://twitter.com/ctaslaman)

カバーデザイン：ユヌス・カラアルスランレイアウト：

アーテム・シエネル ISBN：978-8727-03-2

印刷およびカバー：Pasifik Ofset Ltd. Şti.

住所：Cihangir Mah. Güvercin Cad.

No: 3/1 Baha İş Merkezi A Blok Kat: 2 34310

Haramidere/İSTANBUL Tel: 0212 412 17 77 Certificate

No:12027

出版社：İstanbul Yayınevi

住所：Çağaloğlu Yokuşu Evren Han No:17 Kat:1 Daire:33

ŞİRKECİ – İSTANBUL

Tel: (0212) 519 62 72 Fax: (0212) 513 73 86

www.istanbulyayinevi.net

bilgi@istanbulyayinevi.net

facebook.com/istanbulyayine

vi

twitter.com/istanbulyayinevi

「テロ」と「ジハード」のレトリック

哲学的・神学的考察*

ジャンネル・タスラマン

・本書の原書は2007年2月に日本中東学会年報が刊行した筆者の英語論文「『テロ』と『ジハード』：哲学的小よび神学的考察」を、筆者がトルコ語に訳したものである。

フェリヤルハ

ジャーナル・タスラマン(Caner Taslaman)について：

トルコのボアジチ大学文理学部社会学科を卒業。マルマラ大学大学院神学部哲学・宗教科学科で「ビッグバン理論の哲学・神学との関係」をテーマとする論文により修士号、「進化論の哲学・神学との関係」に関する論文により博士号を取得した。その後、「量子論の哲学・神学との関係」をテーマとする本を執筆して准教授となり、「科学・哲学・宗教の相関関係」についての研究を経て教授となる。また「グローバリゼーションにおけるトルコのイスラム」の研究を経て二つ目となる博士号をイスタンブール大学大学院政治科学部で取得した。

その後、東京大学、次いでオックスフォード大学で博士研究員を務め、ハーバード大学とケンブリッジ大学で客員研究員を務めた。最近の研究で、また海外の大学で最も焦点を当てているテーマは「現代科学・哲学・宗教の関係」。トルコのユルドゥズ工科大学文理学部人文社会学科（哲学専攻）現教授。最も関心の深い分野は「科学・哲学・宗教の関係」「グローバリゼーションとイスラム」、「クルアーンと科学」、「宗教哲学」、「科学哲学」、「物理学の哲学」、「生物学の哲学」である。

目次

序文	9
レトリックとして利用される「テロ」の概念.....	13
レトリックとして利用される「ジハード」の概念	18
クルアーンにおける「ジハード」の意味.....	20
クルアーンと戦争倫理.....	24
クルアーンに基づく和議の締結とコミュニケーション的行為.....	29
「要因」となることと「動かすための要素」となることの違い.....	32
例外的な緊急事態	36
参考文献.....	39

序文

2001年9月11日、世界貿易センター（WTC）のツインタワーが崩壊するさまを、全世界が生中継で見守った。「テロ」そして「ジハード」という言葉が世界中で頻繁に用いられるようになったのは、この頃からである。本書では、この二つの言葉が明示する事件ではなく、言葉そのものについて取り上げた。利益のために集団を誘導しようとする者は、言葉の使い方を操作して目的を達成しようとする。この二つの言葉に関連するレトリックが生まれる理由がそれと関係していることも、本書で示そうと努めた。

本書で「レトリック」とは、特定の利益、特に政治的な目標を達成するために人々を説得するための言葉の使い方を意味する。イデオロギーや思想を強固にする、あるいは支持を取り付けようとする者は、集団を説得しなければならない。メディアが盛んにプロパガンダをして説得することもあれば、政治や宗教の権威が自分のカリスマ性や人々へのヘゲモニーを利用してそうすることもある。こうした状況において「レトリック」は常に、説得のための重要な一端を担う。しかし、何が「正しい」かを理解することなどを考えるのであれば、「テロ」と「ジハード」の概念を、レトリックに囚われることなく哲学的に考察しなければならない。このうち「ジハード」は神学上の概念であるため、その概念を神学の面から評価することも必要である。レトリックの雨が降り注ぎ、言葉巧みに「正当性」を生み出そうとする動きが絶えない状況でレトリックに囚われないようにするためには、物事を哲学的・神学的に評価することが不可欠である。私が本書を執筆した理由の一つも、この必要性に応えるためであった。

本書では「テロ」の概念を取り上げつつも、「ジハード」の概念を考察することにより多くのページを割いた。クルアーンで「ジハード」の概念がどんな形で用いられているかを明らかにし、一部の宗派が「ジハード」をクルアーンの精神に反する形で解釈していることを示そうと努めつつ、クルアーンの観点から見た「戦争倫理」を取り上げた。また、カント、ロールズ、ハーバーマスといった著名な倫理哲学者の思想に言及しつつ、これらのテーマについて考察し、そうして哲学的考察と神学的考察を一冊の本にまとめようと試みた。

本書では、哲学が（広く誤解されているように）抽象的なテーマのみに関連するものでないこと、現代世界で人々に影響を及ぼしている最大の問題に関して哲学的な考察をすることがどれほど重要であるかということも例を挙げて示そうとした。世界平和を実現するには政治的利益に操作されるレトリックを阻止すべきであり、哲学こそが世界平和への道において大きな役割を担うと私は考えている。本書の大部分は、東京大学で客員研究員を務めた時期に執筆したものである。東京大学と、同大学で私の研究に貢献して下さった竹下政孝氏とハールーン・アナイ氏に感謝の意を表し、本書を手にとって下さった読者の方々にもお礼を申し上げます。批評や意見があればウェブサイト <http://www.canertaslaman.com/> にお寄せいただきたい。

本書の目的は、「テロ」と「ジハード」の概念がレトリックとして使われるがために生じる問題、そしてそれが文明同士間のコミュニケーションをどう妨げてきたかを明らかにすることである。本書で意図する「レトリック」とは、言葉が説得する手段として、特定の利益、特に政治的な目標を達成するために利用される状況を指している。



2001年9月11日に攻撃を受けた「世界貿易センタービル」

冷戦が終了したことで、グローバル化を妨げる障害は全て取り除かれたという楽観的な雰囲気広がった。しかし、2001年9月11日に「パンドラの箱」は開かれた。グローバル化する世界のレヴィアタン¹とみなされていたアメリカの心臓部にあったツインタワーと共に、楽観的な雰囲気も消え去った。この事件の後、1991年に起きた湾岸戦争を理由に当初から楽観的な雰囲気に懐疑的で「文明同士の衝突」を擁護していた人々の意見が、より一層注目されるようになった。この事件により生まれた議論の数々は、宗教哲学、政治哲学、言語哲学、美学、解釈学、国際関係、神学など、多くの分野に関連している。

デリダが9・11事件を解釈するにあたって述べた次の意見を引用しつつ、本書の内容に入っていきたい。「哲学者は、『理解すること』と『正当化すること』を区別するための新たな基準を探求する人物たるべきであ

¹レヴィアタン（リヴァイアサン）は、旧約聖書に登場する海の怪物である。政治学と哲学ではトマス・ホブズの著書として有名である。この著書でホブズは、支配者が絶対的権力を持つこと以上に社会に混乱が広まることの方が悪い状態であると伝えつつ、支配者の絶対的権力を正当化している。

る。人は、戦争やテロを引き起こす一連の事件や事象を、それを微塵も正当化することなく、さらには忌み嫌
いつつ、あるいは新たな事象を生み出そうとしつつも、理解し、説明し、解説することができる。人は、テロ行
為を（国家テロであろうとなかろうと）引き起こす、さらにはそれを正当化する状況を見捨てることなく、無条
件に忌み嫌うことができる²」

² Jacques Derrida, *Autoimmunity: Real and Symbolic Suicides, A Dialogue with Jacques Derrida*, Giovanna Borradori'nin röportajı, *Philosophy in a Time of Terror içinde*, translator: Pascale-Anne Brault and Michael Nass, Supervisor: Jacques Derrida, (The University of Chicago Press, 2003), p. 106-107

レトリックとして利用される「テロ」の概念

ある研究で、「テロ」に 109 種類の定義があることが確認された³。今日私達が頻繁に耳にするのは、「テロの本来的意味とは...」「本来のテロリストとは...をする者のことである」「彼らは我々をテロリストと呼ぶが...」といった発言である。こうした定義の全てにおいて、「テロ」はプラトンの「イデア」であるかのように扱われ、またその「本来的意味⁴」を保証するのも、定義する者自身の「イデア」のようである。本来忘れてはならないのは、ウィットゲンシュタインが明言したように、言葉が社会によって共有され、社会の中で学び取られる「手段」の集合体であること、そして私達全員が大いなる言葉のゲームの一端を担っていることである⁵。言葉の社会学的構造がわかると、テロを定義する文言を次のように修正することができる。「人々は、テロという言葉により、概ね...を意図している」

「FBI の定義によれば、テロリストとは...」「ヒズボラの定義によれば、テロリストとは...」。こうした文言により、テロの定義が無垢なものではなく、特定の利益やイデオロギーと絡んでいることに気付く。フーコーが言ったように、私達は「正当性が力によって作り出される状況と対峙している⁶」のである。力を手段として行使する方法の一つは、言葉がどう使われるかを決定付けることである。

「テロ」の概念が初めて登場したのは、1789 年のフランス革命の時期である⁷。ジャコバン派が使う「テロ」の概念には、私達が日常的に用いるのとは違い、前向きな意味があった。というのも、ジャコバン派は自分達の「テロ」という暴力的行為を平和に満ちた環境を作り出すために必要なものと考えていたからである。現在では「テロ」は、誰もがよく知るように後ろ向きな意味を持つ。そのため、誰もが自分のライバルを「テロリスト」と定義しようとする。誰かがいる者から「自由の戦士」、別の者からは「テロリスト」と認識されるのは、そのためである。

³ Nezh Tavlş, Terörü Tanımlamak, (Strateji Dergisi, Sayı 2, 1995), p. 125

⁴ 多くの人々がテロの意味を無意識的にこのように用いているが、プラトンの説く世界にテロを意味する「イデア」（真の姿）があると説明できる人物がいるとは、私は思わない。

⁵ Ludwig Wittgenstein, Philosophical Investigations, (Blackwell Publishing, 2001). この著書は、ウィットゲンシュタインの第二期の哲学が示している。

⁶ Michel Foucault, Power, Right, Truth, ed. Robert E. Goodin and Philip Pettit, Contemporary Political Philosophy, (Blackwell Publishers, 2002), p. 543

⁷ Bruce Hoffman, Inside Terrorism, (Columbia University Press, 1998), p. 15



ヒズボラ結成者ムハンマド・フセイン・ファドラッラー

例えば、多くの人々がテロ組織とみなしているヒズボラの結成者ファドラッラーは次のように語っている。「我々は自らをテロリストとみなしていない。なぜなら我々はテロリズムを信じていないからである。我々の故郷を占領する者と戦うことはテロではない。我々は自らを聖なる戦いを行う戦士とみなしている⁸」

ファドラッラーは、自ら結成したヒズボラの活動を「自由のための戦い」と定義し、正当化している。

一方、FBI はテロを、「政治的または社会的な特定の目的のために政府、一般人の全てまたは一部を脅迫または圧迫するために個人や財産に対して武力や暴力を違法に行使すること⁹」と定義している。FBI の定義で「無実の人々」ではなく「一般人」という用語が用いられ、また政府（国家）に矛先を向ける行為に触れているのは、FBI の立場に関連している。歴史上テロという概念が初めて用いられたのはフランス革命の時期で、その目的は国家が行うテロについて説明することであった。また、19 世紀末と 20 世紀初頭のハーグ条約や 1949 年に締結されたジュネーブ条約などの国際条約は、国家ですら犯罪を含む行為に参与する可能性があることを示している。だとすれば、テロとは、テロという言葉を用いる者のアイデンティティーからではなく、その使い方とその犠牲者の性質から生まれる倫理上の問題である¹⁰。一般人に対する攻撃は倫理上の悪とみなされる。というのも、軍隊は強力な武器や大砲などの装備を持っているが、一般人は脆弱な素手によってしか反撃できないからである。しかし、一方で高度な技術を備えた軍隊を相手に戦う兵士

⁸ Bruce Hoffman, *ibid.*, p.31

⁹ Terrorism Definitions, www.fbi.gov/publications/terror/terror2000_2001.html, Code of Federal Regulations 第 28 条, 0.85 項, (20 April, 2006)

¹⁰ Tomis Kapitan, “Terrorism” as a Method of Terrorism, ed: G. Meggle, *Ethics of Terrorism and Counter Terrorism* in içinde, (Ontos-Heusenstamm, 2004), p. 23

や戦士の多くも、軍隊と対峙する一般人と大して変わらない。なぜなら、彼らも最新鋭の爆撃機に対して同じように無力であり、絶望的な状態に置かれるからだ。ハーバーマスは、この不釣り合いな状況から生じる倫理的問題に次のように注意を促している。

「電子的に制御され、緻密に設計され、多目的に使用されるミサイルが空中で発揮する破滅的な威力と、地上でカラシニコフ銃を手にした髭を生やした原始的な戦士の集団という不釣り合いな光景は、倫理的に嫌悪すべき光景である¹¹⁾」

「テロ」の概念がレトリックとして使われた最も興味深い例に、アメリカ人のアフガン人戦士に対する姿勢がある。アメリカは、アフガン人戦士を「聖戦士」と呼び、ソ連の侵略に対して戦う彼らを支援した¹²⁾。タリバンがアメリカを攻撃し始めると、「聖戦士」は「テロリスト」に変わり、「テロとの戦い」においても最初の標的となった。

どの暴力行使者の間でも対話はますます困難になり、一般人や無実の人が死ぬ度に、その国の国民あるいは犠牲者の民族の復讐の念が煽られ、そうして復讐の連鎖が次々に暴力を生んでいる。自爆攻撃犯を対象に行われたある研究では、そうした攻撃犯の多くが戦いで近親者あるいは愛する人を失った者であることが明らかになった¹³⁾。この研究は、暴力が行使される度に世界平和が（こうした行為の連鎖が復讐の感情を呼び覚ますことから）ますます大きな危機に瀕していることを如実に示している。

デリダは、世界中のどの「テロリスト」も、自分より先にまず国家が犯した「テロリズム」（「テロリズム」ではない名称を持つ、信憑性の高い、あるいは低い正当性の背後に隠れたテロリズム）に対し、自己防衛として反撃しているのだと主張すると述べている¹⁴⁾。暴力行使者が自分の行為を正当化するための「言葉の使い方」の背後にある動機は、「彼ら」は「我々」の味方であるかないかにかかっている¹⁵⁾。コーディが「テロリズムの倫理」という論文で引用した次の詩は、「テロ」の概念をレトリック化することに対して皮肉な問いを投げかけている。

爆弾を投げつけることは悪いことであり

爆撃することは良いことである

¹¹⁾ Jürgen Habermas, *Fundamentalism and Terror, A Dialogue with Jürgen Habermas*, Giovanna Borradori'nin röportajı, *Philosophy in a Time of Terror* içinde, 訳者: Luis Guzman, 校正: Jürgen Habermas, (The University of Chicago Press, 2003), p.28

¹²⁾ Mehmet Ali Civelek, *Küreselleşme ve Terör, Saldırganlık Gerçeği*, (Ütopya Press, 2001), p. 288

¹³⁾ Deniz Ülke Arıboğan, *Tarihin Sonundan Barışın Sonuna*, (Timaş Press, 2003), p.78

¹⁴⁾ Jacques Derrida, *ibid.*, p.103

¹⁵⁾ C.A.J. Coady, *The Morality of Terrorism*, (*Philosophy* 60, 1985), p. 63-64

とどのつまり、テロの意味とは

誰が統治者の冠を被っているかにかかっている¹⁶

コーディは、暴力を正当化するための「言葉の使い方」の背後にある動機は、「彼ら」が「我々」に味方するかしないかにかかっていると言う¹⁷。アメリカの哲学者トミス・カピタンは、テロをレトリックとして使うことで生まれる弊害を次のように的確に言い表している。

「レトリックは、有意義な政治的議論を黙らせるのに使われる。普通の状況においては『なぜ？』と問う者でも、自分がテロを寛容に捉える者と思込まれることを恐れる。レトリックを攻撃的に使う者は、批判的な捉え方と譲歩的な捉え方の違いを意図的に捻じ曲げるためにレトリックを使う。レトリックに屈した者は、自国の政府がテロに関与した者だけでなくテロリストの出身民族（なぜならテロリストも大抵は一般人であり、他の一般人とあまり交流することなく共存しているため）に矛先を向けた暴力行為をも支持することで、復讐の連鎖を悪化させる。その結果、一般人を標的にした政治的動機を含む暴力が、何らかの名のもとに（『復讐』または『対テロ』という別の名のもとに）拡大する。テロに関するレトリックは、力の言葉しか知らない。自分は耐え難い不正義の犠牲者であり、自分を弾圧する者に対して受け入れられる譲歩をしても相手に和解する意志がないとみなした者は、暴力にさらなる暴力で応酬しようとする¹⁸」

「テロ」の概念をレトリックとして使うことでそのレトリックを使う者にとって弊害になり得る結果は、異なる集団、さらには敵同士でさえ、暴力行為をめぐって団結し、同盟しやすくなることである。

¹⁶ C.A.J. Coady, *ibid.*, p.47

¹⁷ C.A.J. Coady, *ibid.*, p.63-64

¹⁸ Tomis Kapitan, *ibid.*, p.28, これも参照; Tomis Kapitan, *The Rhetoric of Terrorism and Its Consequences*, (*Journal of Political and Military Sociology*, Summer 2002)



例えば、アルカイダは「ジハード」などのイスラム的概念を、シーア派に対してもアメリカに対するのと同じようにレトリックとして使い、アフガニスタンでシーア派を虐殺した。シーア派とアルカイダを「イスラム主義者テロリスト」などの名称で同一視し、「テロとの戦い」も彼らに対する別の陣営として位置付けることで、大量破壊兵器を持つと考えられているイランがその兵器をアルカイダと共有する決定を下してしまえば、これらのグループを同一視する者に新たな災厄が降りかかりはしないだろうか？ また、ムスリム人口を多く抱える諸国家が意見を一致させた政治的テーマというのはめったにない。そうしたテーマの一つに、パレスチナ問題においてパレスチナの人々が不当な仕打ちを受けているという考え方がある。イスラエルと対立するパレスチナ人グループを「テロリスト」と呼んでアルカイダと同一視すれば、世界の一端でパレスチナ人に対しさらに激しい反発が起きるだろうが、それと同時にアルカイダは世界各地で支持者を集めやすくなる。

ある行為を「テロとの戦い」あるいは「ジハード」と呼び、その正当性を有無を言わず認めさせることは、倫理上の観点から許容できるものではない。こうしたレトリックを使って暴力を行使する者は、自分の行為はどんな問いかけよりも優位であると主張する。しかし、特定の名前をつけ、また自分の利益に有利になるように言葉の概念を定めても、その行為が正当か不当かという議論を黙らせることはできない。どんな「行為」も、他の行為と区別し、分析的な視点から検証することが必要である。すべての行為を一つの名前で一つのカテゴリーにくくることは、そうした行為の理由や目標がそれぞれ違うために誤っている。また、こうした方法が世論を操作するのに役立つと考える者は、気づかないうちに自分の敵の数を増やす可能性があるということを忘れてはならない。

レトリックとして利用される「ジハード」の概念

「テロ」と同じように、イスラムの多くの概念、特に「ジハード」も、明らかに、レトリックとして使われている。しかし、ムスリムにとって、クルアーン上の概念の存在的立場と、人間が作り出した概念のそれには大きな違いがある。「テロ」の概念の意味は、社会学的研究によってのみ明らかにすることができる。社会学的・歴史学的研究を行い、政治と社会の関係を明らかにすることは、このイスラム的用語がどのように使われているかを理解するためにも必要である。しかし、イスラム的概念は、「テロ」とは異なり、その概念の「本当の意味」を学ぶことができるテキストであるクルアーンで使われている。イスラム的概念は、クルアーンに記されていることを相応に解釈し、捉えることで明らかにすることができる。イスラムにとってクルアーンは、神が人間との関係を築いたテキストであり、預言者ムハンマドの最大の使命も、神のメッセージを人々に伝えることであった。クルアーンは、神を拠り所とするために人間を超越しているが、その言葉、文字、文章は人間に向けたものである。クルアーンの「人間を超越した」特徴は、イスラム的用語の「本当の意味」にとっての拠り所である。クルアーンは人間のために記されているので、この「本当の意味」を理解するためには相応なアプローチが欠かせない。ただし、そのための研究をするときは、人間による解釈が神の啓示と同様に保証されるものではないということを、念頭に置かなければならない。

私利、誤った解釈、古い伝統の影響、そして政治的 목적は、クルアーンが誤って理解され、その意味が歪曲され、ハディースやファトワー（宗教的見解・判断の意味）などの宗教化された他の書物がクルアーン以上に重視されている原因であるが、クルアーンは今も「本当の意味」を伝える書物として存在している。現代イスラムの思想家達の大半は、個人レベルでは大きな違いがあるとはいえ、ハディースがクルアーンよりも重視されることを批判している点で共通している。サイド・アフマド・ハーン、ムハンマド・アブドゥフ、ラシード・リダー、メフメト・アキフ、アフメト・エミン、タウフィーク・スドゥク、マフムード・アブー・ライヤ、ムハンマド・アル・ガザーリー、ファズルラフマンは、そうした思想家のほんの一部である¹⁹。実際には、現代なされているこのような批判が預言者ムハンマドの死後の数百年間にも頻繁に行われていたことが、イスラムの文献からわかっている。ここでこの思想家たちが主に批判しているのは、預言者ムハンマドの言葉をクルアーン以上に重視すること、あるいはクルアーンに取って代わるものとする点ではない点に注意しなければならない。イスラムによれば、預言者はクルアーンに反することを語らないからである。彼らが批判しているのは、預言者の死から300年後に編纂された最も有名なハディース書にすら、人々が誤って、意図的に、また政治的 목적のために多くの風聞を取り込んだことである（私達がハディースが風聞であることの最大の証拠としているのは、ハディースの内容にクルアーンとの矛盾があることである）。

この問題を解決する唯一の方法は、相応な解釈的アプローチにより、特に政治的 理由によるクルアーンの誤った解釈、ファトワー、風聞のハディースを取り除き、ジハード、戦争、信仰の自由といった事柄に関するイス

¹⁹ M. Hayri Kırbaoğlu, İslam Düşüncesinde Hadis Metodolojisi, (Ankara Okulu Press, 1999), p. 14-15

ラムの姿勢を明示することである。

ハサン・サッバーフとその暗殺教団（12-13 世紀）は、宗教用語を政治的利益のためにレトリック化した者として有名な例である²⁰。最近でも、宗教的概念がレトリック化された事例は多くある。1991 年の湾岸戦争の際にサダム・フセインを相手にアメリカが先導する連合軍に加わったイスラム諸国の首脳達は、その行為を正当化するために宗教指導者からファトワー（判断、見解の意味）を受けた²¹。一方、オサマ・ビンラディンは、イスラムの指導者達がファトワーを受けて行った湾岸戦争を、アメリカと戦う（ジハード）理由として示した²²。こうした出来事は、「ジハード」や他のイスラムの概念がレトリックとして使われた無数の例のほんの一部にすぎない。本来、中東でイスラム上正当化されていない戦争を起こすことはとても難しい。その理由は、イスラムの啓示から現在までずっとイスラムがこの地域の文化の最大の要素だったからである。戦争となると、最も世俗的な者でさえ、民衆の支持を取り付けるために宗教的概念をレトリックとして使った。デイヴィッド・ラポポートは、サダム・フセインが完全に保守的な宗教者と対立する世俗的リーダーでありながら、イラク国民を動かすために「ジハード」という言葉を使ったさまを、次のように説明している。「サウジアラビアの聖地を悪魔と占領から救い出し、異教徒（欧米人）をこの地から追い出すためにジハードを呼びかけた。フセインがメッカのモスクに口づけをしたときのシャツのない姿を捉えたカラー写真と、イスラムの最も神聖なモスクで軍服を着て礼拝する様子を捉えたもう 1 枚の写真が、フセインの演説が流される際に交互に映し出された。湾岸危機が始まった 1990 年 8 月以降、フセインが使う言葉は宗教色を帯びていった。これは非常に皮肉なことである。キリスト教徒が設立したフセインの政党は、イラクを世俗国家にするために尽力した。その一方で、フセインがこの演説をしたときは、イスラム保守層にする大きな代償つきの闘争が終わってまもないころだったのだ²³」

²⁰ Abdülkerim Özaydın, 'Hasan Sabbah' maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, 16th (Türkiye Diyanet Va

²¹ John L. Esposito, *Unholy War*, (Oxford University Press, 2002), p. 34

²² Michael S. Swetham, Yonah Alexander, *Bir Terörist Ağının Profili: Usame Bin Laden*, (Güncel Yayıncılık, 2001), p. 129-130

²³ David C. Rapoport, *Some General Observations on Religion and Violence*, (Journal of Terrorism and Political Violence, no:3, 1991), p. 122

クルアーンにおける「ジハード」の意味

クルアーンにおける「ジハード」の概念は、「努力する」「奮闘する」という意味で使われており、心理的、知的、社会的な面での意味合いを持つ。

神の名において行う戦いも「ジハード」と呼ばれる。その戦いが敵に対して奮闘するという意味だからである²⁴。ジハードという言葉がこの意味で使うクルアーンの文言を次に挙げる。

悔悟章 9-41節：軽装備、重装備で戦いに赴きなさい。そしてあなた方の財産と生命をかけて、神の道のために奮闘努力しなさい。あなた方が理解するならば、そうすることがあなた方にとってより善い。

クルアーンに登場する“qital”、“harb”という言葉も戦いを意味するが、このテーマを扱った論文や本では「ジハード」という言葉により重点が置かれており、イスラムのもとに行う戦いは概ねこの「ジハード」という名前で研究されている。ただし、イスラムにおける「戦い」そして「ジハード」について研究する者は、この二つの言葉が登場するクルアーンの文言のすべてを考慮しなければならない。

ムスリムは神の名のもとに行われる戦いのみに加わることができ、自分の利益のために戦ってはならないということは、大抵はそれぞれの行動に違った形で反映されているとはいえ、人々の意見が一致している点だと言える。最大の違いは、「ジハード」がムスリムの自己防衛のための戦いか、他の宗教の信者に対する（その宗教の信者であるという理由だけの）戦いかということである。

クルアーン全体を俯瞰すると、戦争に関するクルアーンの文言がムスリムに戦いの矛先を向けた者に関するものだということがすぐにわかる。それに関する二つの文言を次に挙げる。

雌牛章2-193 節：騒乱がなくなるまで彼らと戦いなさい。もし彼らが戦いを止めるなら、不正を行う者以外は敵視しないようにしなさい。

巡礼章22-39 節：不当な目に遭わされたために、戦いをしかけた者と戦うことが許された。確かに神は、彼らを助ける力を十分に備えている。

ご覧のとおり、クルアーンは、攻撃をしかけてきた者とのみ戦うことを許している。ハナフィー学派、そして一部のハンバル学派とマーリク学派の神学者の見解も同じである。しかし、シャーフィイー学派や他のハンバル学派、マーリク学派の神学者は、イスラム以外の宗教の信者であることだけでも、戦う理由として十分とみなしている²⁵。シャーフィイー学派の宗教指導者は、クルアーンの次の文言によりこの考えを証明しようとする。

²⁴ Bekir Karlığa, Cihad ve Terör, (Karizma, Mart, 2002), p. 118-119

²⁵ Ahmet Özel, 'Cihad' maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, 7.volume, (Türkiye Diyanet Vakfı Press, 1993), p. 528-529

悔悟章9-5節：禁忌の4か月が過ぎたなら、どこであれ、多神教徒を見つけ次第殺し、彼らを捕え、包囲し、あらゆる退路を断ちなさい。

しかし、この文言が登場する悔悟章の全体を俯瞰すると、その相手が、ムスリムと戦い、ムスリムとの盟約の条件に従わない者であることが容易に理解できる。悔悟章1節を読むだけで、この章で許される戦いの相手が、ムスリム以外のすべての者ではなく、預言者ムハンマドとその友人に戦いをしかけた特定の集団だということが理解できる。

悔悟章9-1節：これは、多神教徒のうちあなた方が盟約を結んだ者に対する、神と預言者からの確かな警告である。

ここで警告を受けているのが最初に戦いをしかけた者であることが、悔悟章のその後の文言からはっきりとわかる。

悔悟章9-12節：盟約の後に、またその誓いを破り、あなた方の信仰を罵るのであれば、信仰を否定する者の指導者たちと戦いなさい。彼らは誓いを持たない者である。信仰を否定しなくなればいいのだが。

悔悟章9-13節：誓いを破り、使徒を追放しようと企て、最初にあなた方に攻撃をしかけてきた者と戦わないのか？彼らを恐れているのか？もし信じているなら、神をこそ、最も恐れるべきである。

シャーフィイー学派の神学者達が悔悟章5節をこの章の全体から区別しなければ、相手が「異教徒」であることが戦いの理由にならないことが容易にわかったはずである²⁶。クルアーンを相応な解釈学的アプローチで捉えるための最も大事な原則は、クルアーン全体を俯瞰し、その文言を前後の文言と並んで検証することである。シャーフィイー学派は、ムスリムが攻撃を受けたときにだけ戦うという条件を示すクルアーンの文言の効力は失われていると言い、一部のハディースを利用して自らの考えを証明しようとした。

アフメト・オゼルは、クルアーンでジハードに関する文言同士が互いの効力を奪うという説には科学的な側面が全くないと述べた²⁷。クルアーンの一部が他の部分の効力を奪うという説と、風聞のハディースが宗教的なルールを定める際に果たす役割は何であるかという問題は、イスラムに関して今でも最も頻繁に議論されている。どの文言が否定されているか、あるいはされていないかは特定されていないため、この説を擁護する人々はそれを選ぶ権利を自分の宗派の宗教指導者に委ねた。

ムハンマド・エセトは、クルアーンの文言同士が互いの効力を奪うという説にはクルアーンに基づく論拠がなく、しかもそれを裏付けるための信頼できるハディースは皆無であると述べた²⁸。この点で思い出すべきだが、姦淫した女性に対する石打ちの刑についても（クルアーンと完全に矛盾していながら）この説をもとに証明しようとする動きがある。もしクルアーンを相応な解釈学的アプローチで捉えれば、そしてクルアーンの文言が首尾

²⁶ Hasan Elik, Dini Özünden Okumak, (Marmara University Theology Faculty Press, 2004), p. 165-182

²⁷ Ahmet Özel, *ibid.*, p. 529

²⁸ Muhammed Esed, Kuran Mesajı, translator: Cahit Koytak, Ahmet Ertürk, (İşaret Press, 1996), p. 30-31

一貫しているという基本原則を認めるとすれば（私達はそうあるべきと考えている）、クルアーンの一部が他の部分を否定していると言いながら、否定されたのがどの文言であるかという誰もが受け入れる基準を示せない人々の説は賛同に値しない。クルアーンの一部の文言が他の文言を否定するには、クルアーンの文言同士が矛盾していなければならない。この考えは、クルアーンに矛盾はないという次の文言と相容れない。

女性章4-82節：彼らはクルアーンについて十分に考えないのか？もしクルアーンが神以外の者から下されたとすれば、彼らはその中に多くの矛盾を見出したはずである。

また、先にも述べたように「信頼できる」ハディース書にすら捏造のハディースが多数ある。この問題は、この研究について議論する上で特に重要である。自らの意見に反するクルアーンの文言は「無効にされた」と言い、クルアーンよりも遥かに分量の多い、政治目的によって捏造されたハディースも含むハディース書から自らの考えを裏付けるハディースを選んだ一部の神学権威者は、事実上クルアーン以上に重視された。こうした神学者たちの見解を検証するには、彼らが生きた時代の政治的背景を考慮しなければならない。初期イスラム時代の政治家達は、部族間の衝突により敵同士になったグループを外部の敵と戦わせ、新たな征服活動をするために、その人々の能力を利用しようとした。結果的に言えるのは、「ジハード」のレトリックが生まれたのは政治問題の拡大と密接に関わっているということである。このレトリックは、ムスリムに対してのみ使われたのではない。様々な場面でムスリム同士が互いを「異教徒」と呼び、自分の集団を敵と戦わせるために「ジハード」をレトリックとして利用した。クルアーンのある文言が別の文言を否定するという説、そしてハディースは、「ジハード」に、クルアーンにおける本当の意味ではなく「異教徒との戦い」という意味を持たせるのに大きな役割を果たした。これは、実質的に「恒常的な戦い」という意味である。

ハディース、ファトワー、そしてクルアーンのある文言が別の文言を否定するという説によって生じる別の問題は、信仰の自由に関連している。イスラムから他の宗教に改宗した人々や礼拝を拒否する人々を殺すこと、断食などの宗教行為を実践しない人々をこん棒で殴ることは、そのほんの一部である。しかし、クルアーンには信仰の自由を説く次の文言がある。

雌牛章2-256節：この宗教（イスラム）に強制はない。

覆いかぶさるもの章 88-21・22節：そなた（ムハンマド）は教訓を与え、思い出させなさい。そなたは教訓者、思い出させる者にすぎない。そなたは彼らを強制し、圧迫する者ではない。

イスラムにおいて相手が他の宗教の信者であることは相手と戦う理由にならず、イスラムに強制もないということが明確に理解できれば、このことは文明間の交流の発展にも寄与する。前者の理由は明確である。この説（他の宗教の信者と戦うべきという説）は、常に戦争状態にいなければならないという意味であり、相手との交流を不可能にするからである。後者は前者に比べて間接的である。一見するとこの理由はイスラム社会内の問題と捉えられる。しかし、人々を神の道に招くことが宗教的な義務であるということを忘れてはな

らない²⁹。ムスリム以外の人々をイスラムへと招く一方で、ムスリム諸国で他の宗教に改宗した人々が殺されれば、相手との交流ができなくなる。（このような認識により、アフガニスタンで2006年初期にキリスト教に改宗した人物の死刑が求刑された）クルアーンの文言に反し、宗教の仮面をつけた不正確なジハードの認識や信仰の強制は、相手との交流を不可能にする要因となる。文明間の交流が成り立たない世界に暴力が満ち溢れるであろうことは、想像に難くない。

²⁹ Ismail Al-Faruqi, *The Nature of Islamic Da'wah, Christian Mission and Islamic Da'wah*, (The Islamic Foundation, 1982), p. 33-38

クルアーンと戦争倫理

クルアーンの戦争の捉え方が倫理的にふさわしいかどうかについて、頻繁に議論が行われている。相手との和解が見込まれる場合以外の（後述する）戦争の捉え方は 4 種類ある。クルアーンの捉え方はふさわしくないと言う人々は、他の選択肢のどれが適切であるかを明示すべきだろう。クルアーンによる戦争の捉え方こそ（歴史上の全ムスリムの捉え方ではなく）、倫理的にふさわしいものであり、最も常識的であると、私達は考える。

この 4 種類の捉え方を以下で説明する。

1- 合理的な理由も道理にかなった理由もなく戦うこと

この捉え方は、先にも述べたように、クルアーンに反している。歴史上では、タギー（かつてのインドの暗殺集団）がこのような事例を実践している。タギーは、女神カーリーへの生贄として、捕えた者や、自分の近くを通る多くの無実の人々を殺害した³⁰。

タギーは 1200 年間のうちに、およそ 100 万人の人々を殺害したと考えられている³¹。

2- 合理的な理由のために戦うこと

一般的に、経済的な利益などの合理的な理由が戦争の最大の理由であることは明白である。合理的な理由のために戦う人々は、正義や不正とは、などと憂慮することなく、本来の目的である力を手に入れ、維持するために戦う。このアプローチは歴史上多く実践されてきたとはいえ、哲学的に受け入れられていない。マキャベリはこのようなアプローチを掲げて有名になり³²、マキャベリ後も、数々の哲学的な考察により、類似する思想が伝えられた（例：社会ダーウィニズム）。攻撃をしかけてきた者と戦うことを許可するクルアーンの文言（巡礼章 39 節など）は、それを認めない。しかし、これまで挙げた例にあるように、政治的な目的により宗教が利用された結果、イスラム法学者によるクルアーンのある文言が別の文言を否定するという説や、ハディースを引用した解釈の方が、クルアーンの権威よりもより重視された。人々を戦争へと煽る状況では常に、利益に基づく合理的な理由が宗教的なレトリックによってカモフラージュされ、その戦争には道理にかなった理由があるとの主張がなされてきた。

³⁰ Walter Reich, *Origins of Terrorism*, (Woodrow Wilson Center Press, 1990), p. 121

³¹ Bruce Hoffman, *Inside Terrorism*, (Columbia University Press, 1998), p. 89

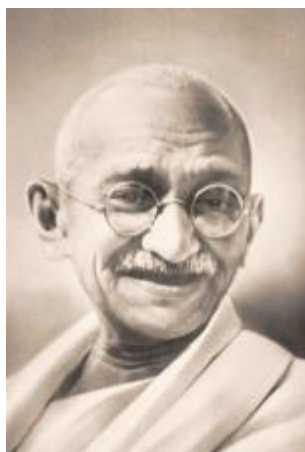
³² Niccolio Machiavelli, *Discourses*, translator: Leslie J. Walker, (Penguin Books, 1955), p. 135

3- どんな状況でも受け身でいること

クルアーンは、完全な受け身に異を唱えつつも、許すことの方が罰することよりも良いと伝える。以下の文言を見るとそれがわかる。

解説された章41-34 節：善と悪は同じではない。より一層の善を行い、悪を遠ざけなさい。そうすれば、互いに敵意を抱く人でも、親しい友人のようになる。

協議章42-43 節：耐え忍んで許せば、それこそが最善の道である。



モーハングス・カラムチャンド・ガンディー

クルアーンは、許すことの方が良いとするが、どんな状況でも受け身でいることを認めているわけではない。個人（ガンディーの例に見られるように）あるいは小規模のコミュニティが受け身を実践することと、一つのコミュニティを完全に亡き者にしようとする動きがあったときに受け身でいることは、それぞれ違った視点で取り上げなければならない。ムスリムは、攻撃を受けたとき、そして相手が自分を亡き者にしようとしたときに戦うよう促される。完全な受け身は攻撃する側をさらに凶暴にし、それは相手が子供、女性、老人を殺害するのをみすみす許してしまうことになる。なので、このような受け身は常識的ではなく、倫理的にも問題である。

4- 道理にかなった理由で戦うこと

クルアーンは、道理にかなった理由（攻撃を受けること）がある場合は戦ってもよいと述べている（全ての非ムスリムとの戦いを正当化する者は、道理にかなった理由とは何であるかという問いを無視し、望む相手に自由に戦いをしかけてもよいという考え方をする）。攻撃を受けた場合に戦ってもよいとするクルアーンの姿勢は、倫理上、1-4 項の中でも最も常識的で相応なものである。自衛権は、国際法も認めているように、

人間の最も自然な権利とされる。国連憲章 51 条によれば、攻撃を受けた者は自衛権を有する³³。



戦時とはいえ、人を殺害してもよいとする文言がなぜクルアーンにあるのか関心を抱く 人々もいる。戦争が、望まれないながらもときには避けて通れないという状況を、現実的な宗教が説明しているのはとても重要なことである。イスラムは殺人を禁じているので、戦争は殺害の許される例外的な状況であることをクルアーンが示していなければ、イスラムは完全な受け身を肯定することになったであろう。クルアーンは、まず相手側が攻撃してきたという条件下では戦うことを許すと告げているほか、「戦争」にかかわる重要な事柄を挙げている。その中で最も重要なのは、預言者ムハンマド以外に、下す決定が神の啓示により承認されている者がいないことがわかっていることである。

なので、どんな人物も、自分は認識的に他人とは違う立場に立っていると、戦争をしかける決定を下しても、その決定には議論の余地が残る。歴史上、様々な宗教の大勢の宗教的権威が、自分はその社会の他の者たちとは認識的に違う立場に立っていると主張してきた。例えば、教会は、聖霊（ガブリエル）の保護下にあり、その立場は民衆とは違うと主張することで自らのあらゆる決定や見解の正当性を裏付けようとした。クルアーンがこのような姿勢を認めていないにもかかわらず、それと類似した主張がイスラム世界でもなされている。一部の人物は聖人であり、その立場からして人々が決して得ることのできない特別な知識を持つと信じられてきた。こうした人物のどの決定にも、議論をさしはさむ余地はないと主張する人々がいる。ある者が聖人視され、さらにはマフディー（救世主）とみなされれば、人々はその者をさらに信じるようになる。こうした特別な地位に立っていると信じられた人物が宣戦布告すれば、無論それは正当とみなされ、その戦争がクルアーンに適っているか、反しているか、または正当か、不正かという議論は無視されることになり、今後もこのようなことが起き得る。

マフディーなる人物がこの世の終わりに現れ、異教徒と戦ってイスラムを守るという信仰は、スンナ派にもシーア派にもある。シーア派は一般的に、この人物は 1100 年以上にわたり身を潜めているとの説を掲げる。シーア派にとってマフディーは非常に重要であり、アーヤトッラー・ホメイニ師が革命を起こす力を備えていたことから、マフディーの出現までホメイニ師がその代理を務めると信じられた。スンナ派では、何千という教団の指導者がマフディーを自称している。マフディーと信じられた人物は、その支持者から絶大な政治的権力を得る。ウ

³³ Hüseyin Pazarcı, Uluslararası Hukuk, Turhan Kitabevi, 2005), p. 512-513

エーバーなどの視点から見ると、マフディーは、カリスマ的な権威というものの最も決定的な姿をしている。テロリズムの根源に関する議論においていつも言及されるハサン・サッバーフも、こうした信仰を利用した³⁴。しかし、クルアーンにはマフディーに関する文言は一切ない。現代のハディースに関する研究の大半が、マフディーに関する説はハディースに記されており、それが政治的な目的のためにあることを証明している³⁵。

オサマ・ビンラディンもマフディーたり得るといふ風聞が広まったことを考えれば、この問題がどれほど重要かがさらにわかる³⁶。

結論として、クルアーンは、預言者ムハンマドの死後、誰であろうと、その者が認識上特別な地位を持つということを認めていない。なので、ある人々よりも優れた特別な地位を標榜して不当な戦争を行うことは、正当化されていない。

戦争倫理からすると、戦争を始めるための条件のほかに、戦争の進め方も重要である。道理にかなった理由により始まったはずの戦争中に不当な行動を取る者もいるように、道理にかなっていない理由により始まった戦争も、公正な形で進めることはできる。戦争の進め方に着目するために、クルアーンの次の文言を考慮しなければならない。

雌牛章2-190 節：あなた方を攻撃する者に対し、神の道において戦いなさい。しかし、限度を超えてはならない。確かに神は、限度を超える者を好まない。

ご覧のように、クルアーンは攻撃をしかけてきた者と戦うことは認めているが、戦いが始まった後はどんな進め方であろうと認めているわけではない。むしろ、戦っているときに限度を超えてはならないと告げている。どの戦争においても新たな現象が起きる。古い武器と新しい武器の違いも、戦争をどう進めるべきかという議論を激しいものにする。クルアーンが戦争の進め方に関する明白な原則以外に詳細を語っていないことで、その時代の条件に適った方法を柔軟に実践することができる。

「イスラムと戦争」というテーマを比較倫理学の視点から取り上げたジョン・ケルセイも言うように、「イスラムは、現代の戦争をどう進めるべきかという条件に、今も一層貢献し続けている³⁷」のである。

後述するが、どんな「相手」とも和議に至ることが可能であるというクルアーンの文言は、戦争の進め方に関するテーマと並んで取り上げることができる。

クルアーンは、戦争の始まりと進め方についての原則を伝えている一方で、相手が和平を望めば戦争を続けてはならないと告げている。それに関する2つの文言を以下に挙げる。

戦利品章8-61：もし彼らが和平に傾いたなら、あなたもそれに傾き、そして神を信頼しなさい。

³⁴ Ali Coşkun, *Mehdilik Fenomeni*, (İz Press, 2004), p.343-345

³⁵ M. Hayri Kırbaşoğlu, *Alternatif Hadis Metodolojisi*, (Kitabiyat, 2004), p.369-370

³⁶ Timothy R. Furnish, *Bin Laden: The Man Who Would Be Mahdi*, (The Middle East Quarterly, Spring 2002)

³⁷ John Kelsay, *Islam and War*, (John Knox Press, 1999), p.76

試問される女性章60-8：神は、宗教上のことであなた方と戦わず、またあなた方を家から追放しなかった人々に、善を行い公正にすることを禁じない。神は公正な人々を愛するからである。

イスラムは、「どの国家にも、道理にかなった理由がなければ合理的な理由のために戦う権利を与えない³⁸」というジョン・ロールズ（戦争倫理を研究する大半の人々も同じ意見を持つ）の言葉どおりの指示をしていると言える。ただし、イスラムとムスリムについては明確に区別しなければならない。ムスリムはイスラムの教えを追求する人々であるとはいえ、ムスリムも（宗教的義務よりも重視されることが多い）合理的な理由上、利益を手に入れようとする。戦争が合理的な理由により始まる場合はたいてい、神学者や宗教指導者が、その戦争が宗教的な理由から必要なものであると伝えるファトワー（宗教的見解・判断）を告げる。戦う人々が戦争を正当視するためにはこうしたファトワーを受けることが重要である。人々を動かすためにイスラムの存在論や終末論が利用されることもあった。イスラムの存在論と終末論によると、全てを創造し、全てにおいて十分な力を持つ神がおり、神は現世の後に来世の永遠の生活を用意しており、全ての人々の来世の生活は現世で行ってきたことにより決まる。

イスラムは、神のもとに行う戦いで殉教した人々は、来世で天国に行けると告げている。結果的にイスラムの存在論と終末論には、現世の利益を超越した目標がある。イスラムによると、殉教者は短い現世の生活から離れた後に完璧な永遠の生活を営む。自らの力のために戦争を起こそうとする者は、この存在論と終末論を利用して人々を動かそうとしてきた。その結果、ジハードが説得の手段として利用された。ジハードがレトリックとして利用されていると私達が言う理由はここにある。

³⁸ John Rawls, *The Law of Peoples*, (Harvard University Press, 2002), p. 91

クルアーンに基づく和議締結とコミュニケーション的行為

ホッブズの思想に続いたカントは、「隣り合って暮らす人々の中の平和状態は決して自然状態（status naturalis）ではなく、それはむしろ、常に布告されるわけではないとはいえ、いつ何時勃発するかわからない戦争状態である。そうすると、持続可能な平和状態を築くことが必要となる³⁹」と述べた。戦争が悲痛なものでありながらも避けて通れないこの世界で、有益な対話がなければ、戦争を克服し、平和を築くことはできない。なので、「異なる人々」、特に、敵との対話についてのイスラムの視点を理解することは極めて重要である。預言者ムハンマドは、偶像崇拝者の集団とフダイビーヤの和議を結び、周囲の一部のムスリムが快く思わなかったにもかかわらず、和議を履行した⁴⁰。

しかし、偶像崇拝者が和議を破ったとき、ムスリムもその履行を止めた。それでもムスリムは全ての偶像崇拝者との和議を破ったのではなく、和議に従った者に対しては、自らもそれを忠実に守った⁴¹。このことはクルアーンの次の文言で明らかである。

悔悟章 9-4 節：ただし、あなた方が和議を結んだ多神教徒達の中で和議を一切破らず、あなた方に敵対する者を助けなかった者は別である。なので、期間が終了するまで彼らとの和議を履行しなさい。誠に神は、神の教えに忠実な人々を愛する。

ムスリムに約束／誓いを守るよう告げるクルアーンの文言も、ムスリムに対して和議を守るよう告げていることから重要である。次の文言がその例である。

夜の旅章17-34 節：約束を守りなさい。約束とは責任だからである。

ムスリムにとって和議を守ることは極めて重要であり、他のムスリムを助けるときも、それより前に結んだ和議を考慮しなければならない。これに関するクルアーンの文言を次に挙げる。

女性章4-90 節：ただし、あなた方と和議を結んだ一派に仲間入りした者、またはあなた方も自分の味方とも戦うことを避け、あなた方のもとへ来る者は別である。もし神が望んでいたら、神は彼らにあなた方を攻撃させ、彼らはあなた方と戦っただろう。もし彼らが身を引いて、あなた方と戦わずに和平を申し出るなら、神は、あなた方に彼らと戦う道を与えない。

戦利品章 8-72 節：信仰し、戦いのために移住し、神の道のために、財産も命も捧げて戦った人々と、

³⁹ Immanuel Kant, *Sürekli Barış Üstüne Felsefi Bir Deneme*, translator: Nejat Bozkurt, Seçilmiş Yazılar içinde, (Remzi Press 1984) p. 233

⁴⁰ Muhammed Hamidullah, "Hudeybiye Antlaşması" maddesi, *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, Cilt 18, (Türkiye Diyanet Vakfı Press, 1993) p. 297-299

⁴¹ Elmalılı M. Hamdi Yazır, *Hak Dini Kuran Dili*, 第4巻, (Zehreveyn), p. 278-279

彼らに避難所を与えて助けた人々は、お互いの擁護者である。信仰しても移住しなかった人々については、彼らが移住するまであなた方が彼らを保護する義務はない。しかし、彼らが宗教に関してあなた方に助けを求めるのなら、彼らを助けることはあなた方の義務である。ただし、それはあなた方と和議を結んだ人々に不利になることのためではない。神は、あなた方のすることを全てお見通しである。

クルアーンが和議を重視していることが現代の問題にとって非常に重要であるということは十分に理解されていない。私が本書を執筆した理由の一つは、このことを十分に伝えることである。クルアーンの文言は、預言者ムハンマドが敵対する人々とすら和議を結び、それをムスリムが守ったことを伝えている。ここから理解すべき原則は、ムスリムにとって和議を結べない敵はいないということである。敵の素性が和議を不可能にする理由になることはあり得ない。

イスラムによると、預言者ムハンマドは、神の特別な保護を受けており、その敵に対する正当性は、啓示（クルアーン）を通じて神から認められている。クルアーンは、預言者以外の者について、その者が認識上特別な立場にいるという考え方を裏付けていない。ここから導かれる結果は、どんな人物であれ、そのカリスマ性が戦争でなく和平を重視するクルアーンの表明よりも優先されてはならず、和平を築き守るための手段となる和議を破ってはならないということである。その人物が、歴史上のカリスマ性を備えた人物であっても、現代のカリスマ的な個人であっても、それは同じである。

また、どんな不和も、新たな事象である。現在ある不和とクルアーンが伝える出来事が類似しているかどうかを考慮し検討することは不可欠である。しかし、こうした出来事のどれも、クルアーンが伝える歴史的な事象と完全に一致しているわけではないことも、念頭に置かなければならない。やむを得ない場合の宣戦布告は、クルアーンの主要原則に沿っていればこそ可能である。しかし、預言者ムハンマドの時代の宣戦布告と、それ以外で戦争が必要とする個人の見解は同じレベルの正当性を持つものではない。後者は神の啓示によるものではないからである。クルアーンの完成とともにムスリムへの啓示も終了したため、もはやどのジハードの宣戦布告も、預言者の時代のジハードと同じように議論の余地がないとはみなされない。この状況から導かれる結論は、ムスリムは、戦争が必要であるという主張に対し批判的な視点を持つべきということである。その視点は、宗教的概念が政治的、個人的利益のためにレトリックとして利用されるのを防ぐために極めて重要なものとなる。

ムスリムは、存在論と啓示に対し認識的な捉え方をすることで、普遍的な真理が存在することを信じる。その点、ムスリムのアプローチは、ハーバースの超越論的実在を認めないアプローチとは異なる。しかし、ムスリムもわかっているが、ムスリムが認める普遍的な真理は、誰もが認める真理とは限らない。では、ムスリムは「異なる者」と対話することができるのだろうか？先に挙げたクルアーンの文言は、それが可能であり、さらには必要なときは敵とも対話することができる伝えてある。和議を結ぶということは、「異なる者」と言語を通じて接触すること、「異なる者」が異なるものであり続けることを受け入れること（これはシャーフィイー学派の認識とは完全に反対である）、「異なる者」が異なる存在論や認識を持っていても、彼らと和解し、和解した事柄に忠実であることを意味する。哲学において「コミュニケーション的行為」の概念を最も有名にしたのはハーバ

ーマスである。ハーバーマスによると、「コミュニケーション的行為」のためには言語を解決の手段として用い、和解に至ることが当事者間の目標でなければならない⁴²。和解に至ることは、コミュニケーションの結果として果たすべき目標である。なので、「異なる者」との和解は可能であるとクルアーンが強調していることは殊更に重要である。和解の前に行われていたことが正当であり、必要であるかどうか、こうして明確になるからである。

⁴² Jurgen Habermas, *The Theory of Communicative Action*, translator: Thomas McCarthy, 1, (Beacon Press, 1985)

「要因」となることと「動かすための要素」となることの 違い

宗教は、暴力を減少させもすれば作り出す面も持つと、ラポポートが述べたのは正しい⁴³。それでも、多くの人と違い、歴史上起きた戦争の大半の要因は宗教であるという説が正しいとは、私達は考えない。まず着目すべき点は、歴史の記述の大半が戦争史であることと、勃発する可能性がありながら行われることのなかった戦争が多く存在したことが確実なのに、そうした戦争を歴史書が伝えていないことである。もし実際にあった戦争の罪が宗教にあるのなら、阻止された戦争のために宗教が評価されてもよくはないだろうか？

宗教的な組織は、戦争の責任を負うときに、和平の責任も負うべきでないだろうか？戦争の罪は宗教にあると言う者は、戦争が行われなかったか、阻止された理由が宗教にあると述べることを避ける。そもそも歴史書が阻止された戦争に関する知識を殆ど伝えていないので、そうすることが難しいのである。実際に起きた戦争の歴史しか知られていないため、異なる視点を持つことは論理的に難しい。また、既知の歴史の中でも宗教の人々への影響が最も少なかった20世紀が、戦死した人々の数が最も多い時代だったということも、忘れてはならない。人類の歴史の大部分において、人々の生活を方向づけた最大の要素は宗教である。なので、戦争の本当の要因が何であれ、戦う人々を動かすために宗教的なレトリックを用いることが必要とされた。たいていの場合、このレトリックがなければ戦争をすることはできなかった。歴史家達が数えきれないほどの出来事を挙げて示してきたように、宗教的なレトリックで行われた多くの戦争の背景にある根本的な要因は、経済的、政治的な力を強化したいという欲求である。ハンス・モーゲンソーの「政治的リアリズム」(political realism) が示すように、合理的・客観的・精神的なものとは程遠い力の策謀が、戦争の本当の要因となったのである⁴⁴。

宗教的な倫理が「政治的リアリズム」の倫理を考慮しないアプローチを否定しているとはいえ、多くの場合「宗教指導者」の見解がより優先されてきた。そしてそれが可能になったのは、これらの「宗教指導者」が政治的権威と近い関係を持っていたためである。カントは「倫理的政治家」(moral politician) と「政治的倫理家」(political moralist) を区別した。前者は政治的原理を倫理に沿って解釈する人物であり、後者は、倫理のルールを自分の有利に変える⁴⁵。「政治的倫理家」の主な目標は、「政治的リアリズム」による力を守り、拡大することである。レトリックとしての宗教的概念は、「政治的倫理家」の手で「政治的リアリズム」の道具として利用されてきた。そのため、戦争が宗教のもとに行われたと思われる多くの事例において、宗教的レトリックは単に人々を動かすために利用されてきたと言える。道徳的価値が勝った事例もあるが、これま

⁴³ David Rapoport, 'Some General Observations on Religion and Violence', *Journal of Terrorism and Political Violence*, No:3, 1991. p. 118

⁴⁴ Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, (Alfred A. Knopf, 1978)

⁴⁵ Immanuel Kant, *ibid.*, p. 128

で述べてきたように、歴史は本来は戦争史であるため、そのような事例は目に留まりにくい。必要となれば力を手に入れるために戦うべきであるとし、この世で力を手にするという目標を、道徳的価値などの精神的なアプローチを考慮せずに達成すべきとする「政治的リアリズム」よりも、この世の利益より重要な利益が存在するという宗教的アプローチこそが、世界に平和を築くという目標にとっては有益であると、私達は考える。

なので、平和を築き守るための活動に必要な対話をするためには、暴力の根源である「政治的リアリズム」が持つ、世界平和を危機に陥れるのも厭わない経済的利益などの合理的な理由による策謀に基づくアプローチに対し、全ての世界宗教を役立てることが必要となる。

イスラムは暴力の要因なのか、人々を動かすための要素なのかという問題をはっきり見極めなければならないと私達は考える。多くの人々がそうすることなく、人々を動かすためにイスラムが利用された多くの出来事において、イスラムこそが暴力の要因であると述べているのが見受けられる。イスラムが暴力の要因であるということは、イスラムが暴力を命じているために暴力がなされるという意味である。実際に「礼拝をしなさい」「断食をしなさい」と命じたり、「豚肉を食べてはならない」と禁じているイスラムは、いろいろな実践や禁止された事柄においてムスリムの行動の源であり、今挙げたこれらの命令や禁止の「然るべき理由」もイスラムである。ムスリムがこうした行為をし、禁止された事柄を避けることの唯一の拠り所はイスラムである。しかし、ムスリムが行った防衛戦を除けば、ムスリムが行ってきた戦争はほぼ全て、経済的、政治的な理由によるものであると言える。さらに、ムスリムが防衛戦として行う多くの戦争においてすら、イスラムが「礼拝をしなさい」「断食をしなさい」と命じるのと同様戦争を起こした要因であるとは言えない。攻撃を受けたコミュニティはたいがい、ムスリムでなくとも、攻撃を受けたときに防衛戦に出る。また、特定の政治的、経済的問題がなかったとすれば、イスラムのもとに行われたとされている戦争の殆どが起きることはなかったであろう。つまり、イスラムは、こうした戦争の「然るべき理由」ではない。イスラム的レトリックを用いて行われる戦争や暴力の殆どの要因は、本来イスラムではない。イスラムは、人々を動かすための要素として利用されているのである。

文明間のコミュニケーションを築くためには、神学的・倫理的・哲学的問題を考察する以外にも、問題の核心にある具体的な問題を解決するよう努めなければならない。ハンティントンによれば、文明間の主要な問題は、経済ではなく、文化と宗教であるという⁴⁶。このようなアプローチでは、欧米とムスリム諸国の間にある問題の経済的な側面を十分に理解することはできない。ハーバーマスは、グローバル化がもたらすコミュニケーションの問題の原因は、文化ではなく経済であると考えため、ハンティントンのアプローチを否定する⁴⁷。

⁴⁶ Samuel Huntington, *The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order*, (Simon and Schuster, 1997)

⁴⁷ Giovanna Borradori, *Philosophy in a Time of Terror*, (The University of Chicago Press, 2003), p. 65



ムスリム諸国は、世界で最も豊かな天然ガス鉱床と油田を持っていながら世界で最も貧しい国々である。世界の人口の22%がムスリムでありながら、ムスリムの所得は世界のわずか 3.8%である⁴⁸。ムスリムが経済的に搾取され、パレスチナで不正に遭っていると考えが、欧米への憎悪感情を生んでいる（本書では、ムスリムが経済的に搾取されているかどうか、またパレスチナが不正に遭っているかどうかという議論は取り上げていない。しかし、この問題の捉え方が何であれ、ムスリムの大部分が持つ一般的な考え方を理解せずに問題を解決するためのコミュニケーションを図ることはもちろんできない）。憎悪は文明間のコミュニケーションを不可能にし、暴力を行使する国家やグループは憎悪感情を利用する。

ムスリム諸国に対して、あるいはイスラムの名のもとに暴力が行使される場合、その最も基本的な問題は（ハーバースも着目するように）、経済問題であると言える。

信仰と文化遺産の視点から見ると、欧米とイスラムの文明はどちらもアブラハムの伝統に由来しており、世界の多くの文明よりも互いに近い。もしイスラム勢力が欧米に対し（ハンティントンが示唆したように）宗教と文化が違うというだけで暴力を行使するとすれば、宗教的に彼らとはるかに異なる日本や中国をまず攻撃すべきではないだろうか？あるいは、キリスト教徒または欧米人というだけで欧米諸国に対し暴力を行使するとすれば、アメリカやイギリスに対する態度をスイスやブラジルに対しても取るべきではないだろうか？ハンティントンによれば、欧米にとっての主な問題は、イスラム原理主義ではなく、イスラムそのものである。ハンティントンのようなアプローチをする人々は、ムスリム諸国の文化を強引に変えようとするか、あらゆるやり方で自らの文化に同化させようとするかもしれない。しかし、それは新たな暴力を煽るだけである。アブドゥル・アジズ・サイドとミーナ・シャリフィ・ファンクの論文にあるように、

「ハンティントンの説は、安全で秩序だった平穏な世界を実現するためには、全世界が欧米の基準と理念に従うべきという条件を唱える文化的優位論者の考え方に満ちている。もし他の者が同調できなければ、問題や衝突は避けられないものとなる⁴⁹」。

⁴⁸ Ahmet Sözen, 'Küreselleşmenin Getirdikleri ve ABD'nin İkilimi', (Karizma, January-March 2002), p. 55

⁴⁹ Abdul Aziz Said, Meena Sharify-Funk, Dynamics of Cultural Diversity and Tolerance in Islam, Cultural Diversity in

一方、ハーバーマスのように考える人々は、経済的な問題を解決しようと努める。問題の原因を突き止める方法が誤っていれば、その解決方法も誤りとなる。多くの人々がイスラムこそが本当の問題であるかのように語っている。「文明の衝突」論は、文明の衝突を起こすための手段として利用されているのである。

例外的な緊急事態



暴力を手放そうとしない者は、人々に戦争の正当性を認めさせ、敵に対して人々を動かそうとするために、あるときは「テロ」、またあるときは「ジハード」をレトリックとして利用してきた。メディアや、経済力と最新技術を駆使して製造された武器の恩恵を受けることができる者がいる一方で、電子装備で身を固めた軍隊に対しゲリラ戦を展開する者もいる。「テロ」をレトリックとして用いる者が、自分のどんな行動をも疑問視されることなく認めさせようとするように、「ジハード」をレトリックとして用いる者も、自分と敵対する者はイスラムと敵対する者であると主張して議論の矛先を向けられることを避けようとする。双方とも、自らに対する反対意見を自らのレトリック（「テロ」と「ジハード」）により黙らせようとする。一方は、一般人に紛れた相手を捕えることができずに砕けたプライドを修復するために諸国に戦争をしかけて一般人を殺害し、他方は圧倒的な技術的優位を持つ相手に復讐するために一般人を攻撃する。その結果、双方とも、何が起きたのかわからない多くの子供や女性の死を招いている。カントの「どの国家も、戦争をするときは、将来的に和平をもたらすことが可能になったときに国家が互いを信頼できなくなるような手段に訴えてはならない⁵⁰」という原則は、常に破られている。本来危険なのは、今起きていることが将来的に阻止不能となるさらに大きな事件を生むことである。この極めて危険な絶望的状况を避けるために、文明間の有益なコミュニケーションを図ること以外の解決は見当たらない。

「ジハード」または「テロとの戦い」のレトリックにより一般人の死を招く者は、その行為を認めさせるために様々な理由を列挙する。それらの理由は、マイケル・ウォルツァーの言葉によれば、「壁に追いつめられた」(back-to-the-wall) ことにある。つまり、戦争の慣習にふさわしい抵抗手段が見込みがなく利用できないものであれば、勝つための方法はどんなものであれ許されることになる⁵¹。ウォルツァーが歴史から挙げた例は、

⁵⁰ Immanuel Kant, *ibid.*, p. 230

⁵¹ Michael Walzer, *Just and Unjust Wars*, (Basic Books, 1992), p. 252

1940年代のイギリスである。ナチスの脅威に敗北する可能性があったため、無実の人々の権利を無視して戦争の協定を破ることを余儀なくさせる「緊急事態」が生じた⁵²。

ウォルツァーは、「彼らは我々をやむを得ない事態に直面させている。そして、やむを得ない事態はルールを無視する⁵³」と述べた。ロールズも、「例外的な緊急事態」があることを認めている。

ロールズは、「この例外は（特別な状況に置かれたときに）、一般人が普通の条件下で戦争の際に直接攻撃を受けるのを阻止する確固たる立場を一時的に留保させる」と述べた⁵⁴。

アンドリュー・フィアラも指摘するように、「テロとの戦い」を認めさせるのに利用される哲学的口実に「緊急事態」がある⁵⁵。しかし、「壁に追い詰められた」状況下では、「テロ」の擁護者も、「テロとの戦い」を擁護する者と同じように、「緊急事態の例外」を実践するための理論を自らの行動を正当化するために利用することがある。一方で、例外を認めないカント的倫理⁵⁶の擁護者にとっては、どんな理由であれ、一般人を死に至らせる両者の論はどちらも不当である。このことは、哲学的な観点から皮肉な結果を生む。ロールズの「緊急事態」を擁護するアプローチは、両者のどちらの正当性も裏付ける際に利用できる論だが、カントのアプローチは、両者のどちらともが相手に罪を着せるために利用できる論となり得るのだ。

本来、戦う当事者が双方ともに自分の正当性を掲げることと、双方ともに不当であるとみなすことの間には、実質的な違いは見られない。暴力行為の倫理性について議論することは、哲学の観点から確かに必要である。しかし、その議論の結果として意見が一致し、実際に暴力が止まるという結果が得られるかという、その可能性はあまりない。なので、哲学的議論の的をより結果が得やすい分野に絞る方が有益である。

まず、文明間のコミュニケーションをどう図るか、そして世界の平和を築き守る具体的な組織は何であるべきか、そしてそれをどう立ち上げるかに焦点を当てなければならない。

ハンナ・アレントも指摘するように、人々を弊害から守る最良の解決策の一つは、人々が政治的プロセスに積極的に加わることである⁵⁷。なので、ムスリムが少数派である地域で、そして大半がムスリムである国で少数派として暮らす人々も、その国の公的・政治的な場に加わるのが重要である。

さらに重要なのは、人口の大半がムスリムである国々が国際的なプロセスに積極的に加わることである。そうすることでその国々は、こうした動きによる保護をより一層受けられ、その動きもムスリムの人々にとって正当性を持ち、問題を解決する力を高められる。特に、国連安全保障理事会が常任理事国の拒否権に関して改革を行うことが、安保理が強い者ではなく正当な者の側にいることを示すために重要となる。こうした

⁵² Michael Walzer, *ibid.*, p. 259

⁵³ Michael Walzer, *ibid.*, p. 254

⁵⁴ John Rawls, *ibid.*, p. 98

⁵⁵ Andrew Fiala, *Terrorism and The Philosophy of History: Liberalism, Realism and Supreme Emergency Exemption*, (*Essays in Philosophy*, April 2002)

⁵⁶ Immanuel Kant, *Critique of Practical Reason*, translator: James Creed Meredith, (Clarendon Press, 1978)

⁵⁷ Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, (Harvest Books, 1973)

動きの正当性を高めるための具体的な取り組みが行われた後は、積極的に行動する平等な当事者としてムスリム諸国も含む協定を提案し、その中で、戦争をどう防ぎ、また実施すべきかで諸国が意見を一致させる必要がある。

コミュニケーションは、国連以外の機構や環境でも、いろいろな方法で図ることができる。当事者の双方がコミュニケーションを取ろうとしないこともあるかもしれないが、どちらの側でも、意志のある者が他の者を気にすることなくコミュニケーションを実現するために努力しなければならない。特定の経済的な利益が原因となって起きる戦争を批判し、また暴力の言葉ではなく対話の言葉を奨励することで、コミュニケーションは発展する。暴力の宣伝に利用されるレトリックから救われれば、対話と平和を模索するときに立ちはだかる極めて大きな障害から救われることになる。このことに関して実現すべき最も有益な哲学的成功は、「政治的倫理家」(political moralists) が国の政権にいる時期でも、世界平和を最良の形で守るための具体的な行動が何であることを示し、それを実現するコミュニケーションの過程を提唱することができることにある。

参考文献

- Al-Faruqi, Ismail. The Nature of Islamic Da'wah, Christian Mission and Islamic Da'wah içinde, The Islamic Foundation, 1982.
- Arendt, Hannah. The Origins of Totalitarianism, Harvest Books, 1973.
- Arıboğan, Deniz Ülke. Tarihin Sonundan Barışın Sonuna, Timaş Yayınları, 2003.
- Borradori, Giovanna. Philosophy in a Time of Terror, The University of Chicago Press, 2003.
- Civelek, Mehmet Ali. Küreselleşme ve Terör, Saldırganlık Gerçeği, (Ütopya Yayınevi, 2001). Coady, C.A.J. The Morality of Terrorism, Philosophy 60, 1985.
- Coşkun, Ali. Mehdilik Fenomeni, İz Yayıncılık, 2004.
- Derrida, Jacques. Autoimmunity: Real and Symbolic Suicides, A Dialogue with Jacques Derrida, interview with Giovanna Borradori, Philosophy in a Time of Terror, trans: PascaleAnne Brault and Michael Naas, supervisor: Jacques Derrida, The University of Chicago Press, 2003.
- Elik, Hasan. Dini Özünden Okumak, Marmara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Vakfı Yayınları, 2004.
- Esed, Muhammed. Kuran Mesajı, trans: Cahit Koytak ve Ahmet Ertürk, İşaret Yayınları, 1996.
- Esposito, John L. Unholy War, Oxford University Press, 2002.
- Fiala, Andrew. Terrorism and the Philosophy of History: Liberalism, Realism and the Supreme Emergency Exemption, Essays in Philosophy, April 2002.
- Foucault, Michel. Power, Right, Truth, ed: Robert E. Goodin and Philip Pettit, Contemporary Political Philosophy, Blackwell Publishers, 2002.
- Habermas, Jurgen. Fundamentalism and Terror: A Dialogue with Jurgen Habermas, Giovanna Borradori ile röportaj, in Philosophy in a Time of Terror içinde, trans: Luis Guzman, supervisor: Jurgen Habermas, The University of Chicago Press, 2003.
- Habermas, Jurgen. The Theory of Communicative Action, trans:

Thomas McCarthy, Cilt 1, Beacon Press, 1985

Hamidullah, Muhammed. "Hudeybiye Antlaşması", Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 18, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1993.

Hoffman, Bruce. Inside Terrorism, Columbia University Press, New York, 1998.

Huntington, Samuel P. The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order, Simon and Schuster, 1997.

Kant, Immanuel. Critique of Practical Reason, trans: James Creed Meredith, Clarendon Press, 1978.

Kant, Immanuel. To Perpetual Peace A Philosophical Sketch, trans: Ted Humphrey, Perpetual Peace and Other Essays, Hackett Publishing Company, 1983.

Karlığa, Bekir. 'Cihad ve Terör', Karizma, Mart 2002.

Kelsay, John. Islam and War, John Knox Press, 1999.

Kırbaçoğlu, M. Hayri. İslam Düşüncesinde Hadis Metodolojisi, Ankara Okulu Yayınları, 1999.

Kırbaçoğlu, M. Hayri. Alternatif Hadis Metodolojisi, Kitabiyat, 2004.

Kuran-ı Kerim, trans: Ali Bulaç, Bakış Yayınları.

Machiavelli, Niccolio. Discourses, trans: Leslie J. Walker, Penguin Books, 1955.

Morgenthau, Hans J. Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace, Alfred A. Knopf, 1978.

Özaydin, Abdulkemim. 'Hassan Sabbah', Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 16, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1997.

Özel, Ahmet. 'Cihad', Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 7, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1993.

Pazarcı, Hüseyin. Uluslararası Hukuk, Turhan Kitabevi, 2005.

Rapoport, David C. 'Some General Observations on Religion and Violence, Journal of Terrorism and Political Violence', No:3, 1991.

Rawls, John. The Law of Peoples, Harvard University Press, 2002.

Reich, Walter. Origins of Terrorism, Woodrow Wilson Center Press, 1990. Schmidt, Alex.

Albert Jongman, et al, Political Terrorism, Transaction Books, 1988.

Swetham, Michael S. Alexander, Yonah. Bir Terörist Ağının Profili: Usame Bin Ladin, Güncel Yayıncılık, 2001.

Terrorism Definitions (28 Code of Federal Regulations, Section 0.85)

<http://www.pa-aware.org/what-is-terrorism/pdfs/B-2.pdf>, 20 Nisan 2006. Yazır,

Elmalılı M. Hamdi. Hak Dini Kuran Dili, Cilt 4, Zehreveyn.

Sözen, Ahmet, 'Küreselleşmenin Getirdikleri ve ABD'nin İkilemi', Karizma, Ocak, Subat, Mart 2002.

Said, Abdul Aziz - Meena Sharify-Funk, Dynamics of Cultural Diversity and Tolerance in Islam, ed: Abdul Aziz Said - Meena

Sharify Funk, Cultural Diversity and Islam içinde, University Press of America, 2003. Tavlas, Nezih.

'Terörü Tanımlamak', Strateji Dergisi, 2, 1995.

Walzer, Michael. Just and Unjust Wars, Basic Books, 1992.

Wittgenstein, Ludwig, Philosophical Investigations, Blackwell Publishing, 2001.